

学会主催の思い出

第22回 会長 西 村 正 也

昭和44年は全国各地において学園紛争のたけなわな時期であった。各学会もそのあおりを受け、学生や青医連による学会の妨害が相次ぎ、学会開催は厳重な警戒裡に行ったり、あるいは途中で妨害され続行不能におちいることもあった。また二、三の学会は開催出来ないまま中止されたものもあった。

私が昭和43年秋、会長を命ぜられて以来、学園紛争は次第に悪化し、九大でも昭和44年に入るや紛争はますます激しくなっていた。6月頃から学内各所が彼等の手によって封鎖され、授業は行なわれず、教授会もほとんど連日のように、これに対する対策会議が行われる状態であった。

初め学会の期日は10月28、29日であったが、かかる不隠な状況に拘らず準備は着々と進み、プログラムの発送も終り、10月に入って開催を待つばかりになったが、九大の学園紛争は依然として解決はみられず、益々状況は悪化して行くので全く気が気でなかった。

折も折、丁度学会開催の2週間前に、不幸にも九大学内封鎖解除のため機動隊導入のやむなきに立ち至った。そのため学内外の混乱は一層はげしくなってきた、学会開催にも支障をきたすおそれが大きくなって来た。

何しろ日時が切迫していたので随分迷ったが、若し強行することにより学会が妨害を受け、続行不可能にでもなれば、はるばる来会された会員各位に申しわけないと考え、急遽10月18日に臨時理事会を東京で開き御相談した結果、現地の事情がそうであればやむを得ないので一応、無期延期ということに決定した。そこで全会員に早速この旨を通知したが、余りにも日時切迫のため、旅券やホテル予約の取り消しなどで各位に非常な御迷惑をかけた次第である。しかしその後、各方面の会員の方から、延期になった学会は何時やるのかという問合せが続々とあった。また会則によっても評議員会、総会は開催地に於て年1回定期的に行うことに決っているため、やはりなるべく早い時期に学術講演を含めて総会を再開すべきであると考えたが、最初の予定会場の福岡市民会館は再度の使用は不可能のため他に会場を探さねばならなかった。ところが幸運にも12月16、17日であれば九州電力の電気ビルが使用出来ることになった。その頃になれば学園紛争も大分下火になって来る見通しがついたので、愈々再開を決意した。

それにしても年末も近づく新しい会期に果して演題を出された会員が全員来て頂けるかどうか心配であったので、全演者に問合せ、また司会者や座長の各位にも、御託と御願を含めて問合せを出したところ、殆んど全員の方から出席の御快諾をいただき、ここに再開の可能性が出来たので、緊急理事会に図った結果、日時の関係もあり評議員会にかけることなく12月16、17日の開催を決定し、全会員に至急通知した。

この再開学会の準備や運営に当っては私の教室のみならず、九大、久大の各外科教室、福岡県、市医師会の方々の御協力による所大であった。かくて案じていた学会には2,000名近い会員の出席を得て、評議員会、総会並びに学術講演会の全日程を無事、盛会裡に終了することが出来た。

幸にプログラムも日時と会場の変更のみの訂正で内容には何等の変更なく、3会場で予定通り開催出来たことは好都合であった。

学術講演はシンポジウムとしてⅠ．乳幼児心臓手術の適応と術後管理（司会は砂田輝武教授病氣欠席のため会長西村が代行した）。

Ⅱ．難治性肺結核の治療（司会，宮本忍氏），Ⅲ．心臓再手術の検討（司会，曲直部寿夫氏）Ⅳ．肺癌の早期診断とその治療成績（司会，香月秀雄氏）Ⅴ．弁置換手術の遠隔成績（司会，杉江三郎氏）の五つの主題をとりあげた。

また次の5題の教育講演を行った。

Ⅰ．臓器移植と免疫（石橋幸雄氏）

Ⅱ．冠動脈の外科（榊原任氏）

Ⅲ．食道癌治療の要訣（矢沢知海氏）

Ⅳ．心疾患の造影診断（玉木正男氏）

Ⅴ．慢性膿胸の外科治療（塩沢正俊氏）

そのほか映画7題，一般演題127題であった。

評議員会は学会前日夕刻，西鉄グランドホテルで行われた。評議員の選出方法について全会員にアンケートを求めていたので，その結果を報告し，これについて討議が行われたが一応現行方法によることになった。

学会地方会の現状ならびにそのあり方について討議が行われた外，標榜科名「胸部外科」について厚生省との交渉の経過が加納前会長より報告され，その名称についても色々意見が出されたが，今後も「胸部外科」の名称でその実現に努力することになった。しかしこの標榜科目は其後歴代会長の努力にも拘わらず今日未だ実現していない。

また別に学会第1日の夜，心肺外科懇話会と，「胸部外科学会のあり方」についての討論会が行われた。この討論会では榊原，宮本，曲直部各教授と若い会員諸氏との間に自由討論が行われた。

思えば一度，無期延期とした学会を僅か1カ月半後に，新たな会場を設定し，しかも年末迫って開催し，全国の会員に福岡の地まで来て頂くというような，常識では不可能としか考えられないようなことが奇蹟的に実現できたのである。全く幸運であつたの一語に尽る。

このようにして名誉ある日本胸部外科学会の歴史に汚点をつけることなく，何とか総会を遂行出来たことは，学会理事，評議員を初め全会員各位の温かい御理解と御協力の賜物と考え，この感激は一生忘れることが出来ない。また学会事務局速見氏その他の方々には格別の御迷惑と御骨折りを忝うした次第である。ここに改めて御詫びと御礼を申上げる次第である。（九州大学名誉教授）